

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU!

無料

第74号

毎月発行

発行 2018年(平成30年)7月16日 月曜日

2018年(平成30年)7月16日 月曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、64歳、経営コンサルタント、趣味は縄文研究、今年1月に『東北先史時代学』を提唱、東北から日本を変えることを標榜する。また放置されている縄文遺跡保存活動として郷里の涌谷町の『長根貝塚保存活動』開始。



東北再興モデルは1300年以前に設定 そこに輝いていた東北文化が見える 連載企画⑦ 【東北先史時代学】

あいまいな根無草文化
の中に生きる息苦しさ

あの東北大震災(当新聞はあえてこう呼ぶ)以来、生活に直結した文化的環境というか、さまざまな情報

が形成する社会環境というか、適切な表現が見当たらないが、そうしたものがあ

いまいで、モヤモヤしている、心にしっかりと根付いていない感覚が続いていた。

自分の内なる心とそうした環境との分離状態がずっと続いていて、居心地がとて

も悪いのだ。

単に「違和感」と表現しては焦点を外している。も

っと根本的なところでのズレがあると感じていたのだ。

他の人に確認したわけではないが、いまでも同じ思

いの人も少なくないのでは

ないかと思っている。

あの震災で揺り動かされ、破壊されたのは、目に

見える家屋やインフラだけ

ではないことは周知のこと

だが、そうした目に見えるものが少しずつ復旧してい

るのに反して、こうした内面の破壊・分裂状態は少しも復旧していないことであらためて気づく。

むしろ、こうした内面の破壊・分裂は放置されたま

まではないかとも思う。

すでに七年も経過したにもか

かわらず、こうした状況

が続くのであれば、今後に

期待するのにもむずかしい

かとあきらめかけたことも

あった。

大震災直後には、既存の

価値観に替わる新たな価値

観を見出さなければならな

いとあれだけ大騒ぎしたの

に、そういう声が世の中に

圧倒的だったはずなのに、

答えがその後も出ず、そし

てまだ出ていないからだ。

みなあきらめたのか、あ

るいはもともと答えを出す

のが無理なのか、分からな

いまま時間が経過した。

空虚な既存価値観崩壊

人が生きていく上で必要なものは、まずは衣食住だと教えられてきたが、本当にそうだろうか。

水や食料と同レベルで、いやその前に、言葉が通じる環境、意思を伝えられる環境、それ以前に、心の中でブツブツとつぶやくための言葉、頭のなかで思考す

西暦年	時代区分(九州・四国・本州)	文化	主な出来事
約10万年前	旧石器時代	旧石器文化	
約1万年前	縄文時代 (約12000年前 紀元前3世紀)	縄文文化	
紀元前4世紀	弥生時代 (紀元前3世紀 3世紀)	弥生文化	水田農耕
紀元前3世紀			「漢委奴国王」の金印
紀元前2世紀			卑弥呼
1世紀	古墳時代 (3世紀後半・4世紀初 7世紀前半・8世紀初)	古墳文化	前方後円墳
2世紀			
3世紀			
4世紀	飛鳥時代 (6世紀末～710)	飛鳥文化 白鳳文化	大化の改新645
5世紀			大聖徳寺701
6世紀	奈良時代 (710～794)	天平文化	平城京遷都710
7世紀			平安京遷都794
8世紀	平安時代 (794～1192)	弘仁・貞観文化 国風文化	
9世紀	鎌倉時代 (1192～1333)	鎌倉文化	元寇(1274と1281)
10世紀			
11世紀			
12世紀	室町時代 (1336～1573)	北山文化	
13世紀			
14世紀	南北朝時代 (1336～1392)		
15世紀	戦国時代 (1467～1568)	東山文化	応仁の乱1467～1477
16世紀	安土桃山時代 (1573～1603)	桃山文化	
17世紀	江戸時代 (1603～1868)	元禄文化 化政文化	江戸幕府1603
18世紀			
19世紀	明治時代 (1868～1912)		開国1858 明治維新 日清戦争1894～1895
20世紀	大正時代 (1912～1926)		第1次世界大戦
20世紀	昭和時代 (1926～1989)		第2次世界大戦
21世紀	平成時代 (1989～)		

注: 上表はフリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』の「日本史時代区分表」を参考に、再編集・再構成したものです。時代や文化を分かりやすく区分・色分けしていますが、実際の歴史は、区分前後でかなり重複しています。

東北再興モデルは奈良時代初期にあり!?

物理的に生きていくことはできるが、内部が棄損したまま生きていくのはつらい。

生活の最深奥部の「文化」と呼んでもいいと思う。そうした人間にとって根幹の「文化の核」を同心円状にくるむような、生活そのものに根ざした文化ともいべき社会的な環境の重要な部分があつたとき大きく棄損したのだ。

したがって、新たな文化的な環境はどうしても必要なのである。生活と切り離れた文化ではなく、生活の根幹に直結した文化的な環境なしには

東北に無関係な人々は無意味に感じている。その手がたえを無意識的に感じている。既存の破壊された文化的な環境、空虚な価値観体系が壊れたために、その裂け目から、あたかもマグマが火口の裂け目から噴出するように外へ出ようとしているかのようだ。

壊れた価値観の中から東北文化が復活する

ここ数年月間は特に、こうした抽象的なことを理屈つぽく、しつこく、飽きずに考え続けてきた。そうして気づいたのは、前記の破壊された価値観とは、この日本全体をおお、少なくともここ数十年以上に亘って浸透してきた価値観であつたことだ。

しかし、その共通の価値観の下には、確かに埋もれた東北独自の文化的環境もあることをあの震災は感じさせた。それはむしろ、この大震災で表に出ようとしているのではないかと感じる。そして、こうした構造に気づくのは特に、東北人、

東北に無関係な人々、かつて東北で暮らした人々であり、彼らが鋭敏に感じているのだと思う。東北の長い長い衰退とともに、「表層」から、かなり深い「基層」へと潜り込んだ東北文化が、大震災を機に表に出ようとしているのを感じるのだ。

識的に気づいているはずだ。あの時から。だが、形がないので表現できない。しっかりと捕まえることができず、手からすりりと逃げ出してしまふ。はつきりと捉えることができず、もどかしいかぎりだ。

東北の「復旧」、「復興」と「再興」

「復興」と「再興」を使い分けている。「復旧」とは、インフラや家屋などを元通りに回復する、あるいは、もっと進めて、七年の空白を埋めて、現代に追いつくようにして回復することである。これはいわば、「外側」の回復である。

「復興」とは、インフラや家屋などを元通りに回復するのではなく、大震災前の東北のすべて、経済活動や人々の打ちひしがれた心を前進する心に転換していくことである。できれば、七年前を回復するだけでなく、現代に追いつくようにして回復することである。

さらに出来るならば、ここ数十年間で衰退を続けてきた東北が大震災前の状況よりもはるかに回復することである。

この数十年間、さらに東北は衰退を続け、人口減少、人口流出、産業衰退等、さまざまな課題を新たに背負ったが、それらを少しでも回復したいという思いを込

めたのが「復興」であった。これは「内と外の総合」の回復である。他方、再興とは、どの時代に遡るのかは別として、東北が真に輝いている時代と同じような状況を取り戻すこととしている。

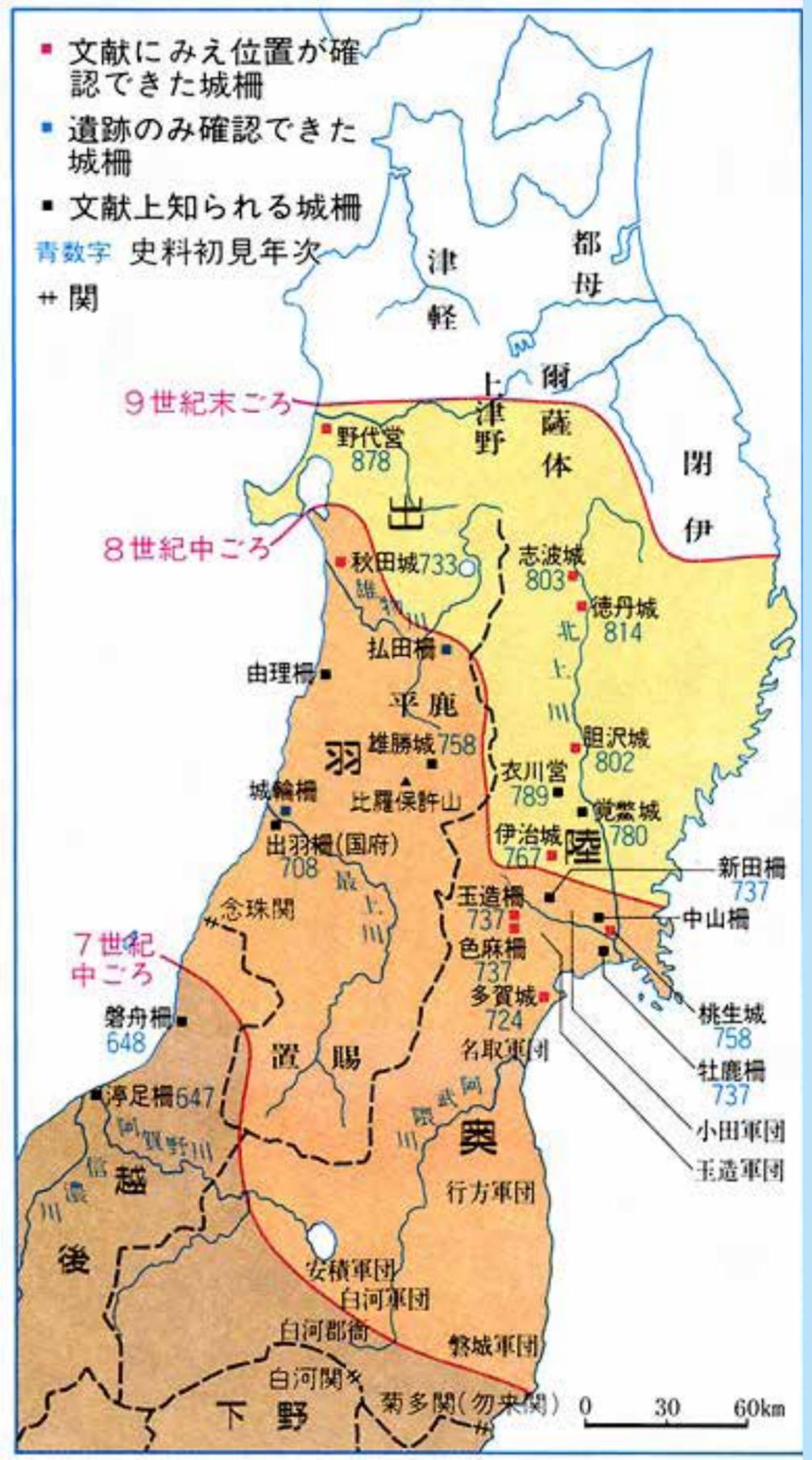
当新聞も当初は、復旧を指すのではもちろんないが、復興を目指すべきと主張してきた。ではなぜ「再興」なのか。それは、どんなに「復興」しても、衰退し続けてきた東北であり、その衰退途上にある状態を回復することには変わりない。

それが今後数十年をかけて東北が目指す目標なのだろうかという疑問が湧いてきた。中長期的な目標として、そんな目標は、嬉々として立ち向かえる目標なのだろうか、あるいはまた、そうした目標実現に果たして力が入るものだろうか。

たとえ数十年後に目標を達成したとして、そのときに、周囲を見回したとき、依然として、国内の他地域よりも遅れている、最後尾近くを歩んでいる東北であることが分かったときにはどんな思いを抱くのだろうか。

そう考えたとき、「復興」ではやはりだめなんだと思つたのである。「復興」ではなく、やはり東北が輝くことこそ目標に据えるべきである。そして、それを「東北再

興」と名づけようと考えたのだ。非現実的だ、実現などできるはずがない、夢物語だと批判されるかもしれないが、あえてこの「東北再興」を、今後数十年の東北の挑戦すべき目標に据えようとした。



7世紀中頃から9世紀中頃まで約200年間の“国境線”の北上

東北再興モデルはどこにある？

しかし、なかなか「東北再興」の起点を決められない。いまの時代の近くに「東北再興モデル」は見つから

ない。そして時代をどんどん遡っていく。昭和ではもちろんない。明治維新後は最悪である。あつたときから東北の衰退に拍車がかかった。

江戸時代はどうか。伊達政宗の密かな日本統一の野望はあつたが、はかなく消えた。飢饉も多かった。この時代もモデルにはなりえない。戦国時代にも、安土桃山にも、室町時代にもない。ここですでに五百年以上も時代を遡つた。ここに至

つてもモデルがないというのは、いかに長い衰退期間であるかの証明である。さらに遡つて、鎌倉時代。この時代は平泉が頼朝によって滅ぼされた時代である。さらに平安時代。平安初期には、エミシ最後の抵抗であったアテルイ・モレが投降した時代である。ここまでで千二百年遡つた。

奈良時代はどうか。この時代に多賀城という東北侵略の一大拠点設置された時代である。まさに、この時代が、東

北が中央集権国家日本による支配が開始された時代である。逆にいえば、この時代にはまだ、東北は大和朝廷という中央集権国家とは異なる地域であつたのだ。実に千三百年という時間を遡つてようやく、「東北再興」の起点が見えたのだ。かくも長い間、東北は衰退を続けたのだ。これを裏返してみれば、東北には長期間に亘つて収奪できる富があつたともいえる。

当新聞において、千三百年前に立ち返つて東北を再

飛躍的な超長期視点

興しようという呼びかけの根拠はここにある。日本においては、こうした超長期的な視点はほとんど見かけない。ことに近年は短期的思考がまん延してしまふ。長期的な思考にはなじまない空気が満ちている。したがって容易には受け入れられないだろう。

しかし他国にはモデルはたくさんある。中国の発想も超長期視点である。人間一代ではなく、三世

代で何かを成し遂げるとか、何世代にも亘つて実現を目指すという考え方があつた。百年単位である。きつと、もっと長い視点もあるだろう。

中東でもそうである。あまり良い例ではないかもしれないが、宗教戦争の原因が千年以上前の恨みが発端であつたりする。超長期視点は日本ではめづらしいかもしれないが、東北で日本初の「千年思考」を押し出していきたいと考える。

そうした発想の飛躍がないところに「東北再興」は望めない。それどころか、「東北復興」さえも望めないかもしれない。東北の奮起を切に願う

千三百年前の東北文化

「東北再興モデル」を千三百年前の東北に設定したら、次は中身である。当時の文化、千三百年前の東北の文化はどんなものだったであろうか。

ずいぶん昔の話なので、現代の日本の生活からは想像もできないと言われるかもしれない。時代的に断絶し

ていて、連続性など微塵も存在しないと思われるかもしれない。

しかし、ここに大きな落とし穴が隠されていると考える。それは思い込みによる先入観である。

たとえば、千三百年前の東北には文化らしいものが存在せず、野蛮な生活で、狩猟と採集生活が主体であり、定住などせず、季節ごとに移動していたというものが、自然の運行とともに生きており、他の動物と大した変わりはないというもある。まるで原始生活とでもいべき生活を営んでいたというものである。

また、当時の大和朝廷の支配が及んでいる地域で進んでいた水田稲作文化のような文化はまったくなかったという見方もそうである。そうした先入観は広く、深く浸透していて、容易に切り崩せない。しかし、い

まから千三百年前に先行する一万年も続いた、世界でも稀有な縄文文明という文明があったのだ。いまその全容が解明されつつあり、かなり高度な文化が存在したのである。それに続く千三百年前の東北が、時代に逆行して、原始時代に戻るわけではない。

朝廷側の資料に、こうした先入観につながる記述があるが、それを鵜呑みにした先入観にすぎないと結論付けられるのだ。

思い込みというのは恐ろしい。教育というのはほんとうに恐ろしい。

我々は、明治維新以降ずっと教えられてきた、いわば「明治維新史観」とでも名づけられる歴史の見方に基づく東北古代像を教えられ続けてきた。

前記の千三百年前の東北の文化についてもその影響はかなり強烈である。

中央集権国家が打ち立てた歴史が、反抗勢力の文化を素直に認めるわけがない。かなり長期間に亘り反抗したかつての東北勢力を良く書くわけがないのである。

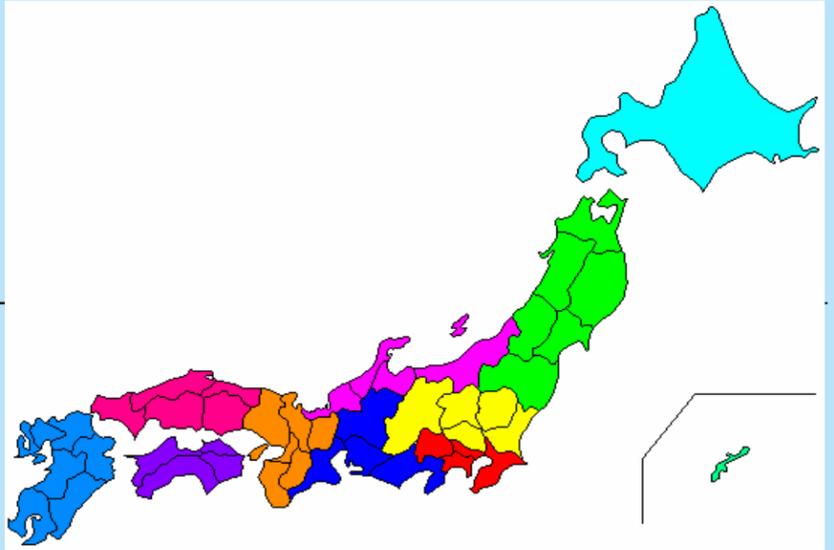
江戸時代まで縄文文化だった

かつて、作家の夢枕獏氏が某TV番組で語っていたことが印象に残っている。彼によれば、江戸時代まで日本には縄文文化が生きていたというのだ。

たまたま、その場面で取り上げられていたのが、河川網を小舟で往来して、海と山間部の交易を担っていた海の人たちの姿だった。その伝統は縄文時代にはじまり、江戸時代まで続いていたというのだ。しかも、その形態にはほとんど変化がないという。

その交易によって、山間部で足の速いサバという魚を加工せずに食することが出来たというのだ。

こうしたことはほんの一例である。その他にも縄文文化の伝統が生きていたの



消滅した道州制・・・東北は広大だ！

である。しかも、それがつい先ごろまで生きていたのである。

そういえば、江戸時代どころではないかもしれない。昭和初期までの東北の習俗には縄文文化の影響が濃く残っていた可能性がある。それを「教育」によって否定されたために見えなくなってしまったのかもしれないのだ。

こうした話を耳にすると、われわれ現代日本人は、何か幻影を見せ続けられているのではないかと印象を持つ。歴史については全面的な見直しが必要ではないかと痛切に思う。

カタルーニャもスコットランドもバスクも文化死守闘争だ

世界に目を向けてみよう。いま世界では独立運動が活発化している。

カタルーニャもスコットランドもバスクなどがそうであるが、もっとあるはずである。

例えば、スペインから独立しようというカタルーニャであるが、その闘争の歴史は千年である。

その闘争は言語をはじめとした文化死守闘争の側面が強いのだ。

こうしたことを東北は見習ってもよいのではないかと思うのである。

カタルーニャ歴史(紀元前10世紀～西暦2006年):カタルーニャ州は、歴史的にカタラン人意識と独立心の強い地方です。

約5000年前: この地方に多くの先住民の「イベリア人」が住んでいた。

紀元前7世紀: ギリシャ人が交易を目的に住みついて海岸沿いにアンプリアス市を作る。

紀元前3世紀～西暦5世紀: ローマ人に征服され、この地方はローマの植民地になる。タラゴナは、イベリア半島の一つの首都になる。

西暦5世紀～7世紀: ローマ帝国が滅亡した後、西ゴート王国が建設されて、バルセロナは西ゴートの首都になる。

西暦7世紀～: イスラム教徒が、イベリア半島を侵略。

西暦732年: イスラム教徒は、フランク王国(現在:フランス)西部のプアティエ市まで侵略。イスラムによる支配。

西暦8世紀: フランク国王は、フランク王国を守る為、ピレネー山脈に辺境領(辺境領とは、国境付近に防備の必要上置いた軍事的領地)を作った後、ピレネー東南部は、カタルーニャになっていく。

西暦988年: 辺境領を統治していたバルセロナ公爵によって、辺境領はフランク王国から独立。

西暦1137年: 政略結婚で、カタルーニャとアラゴンが連合。バルセロナ公爵の称号がアラゴン国王に変わる。

西暦12世紀～15世紀: バレンシア州、アラゴン州、バレアレス諸島、南イタリア、南ギリシャ、シシリア島、サルデーニャ島などが、カタルーニャの植民地になり、カタルーニャは、地中海の貿易で栄える。

黒いエリア:カタルーニャ領地西暦15世紀の終わり頃: カトリック両王の政略結婚でカタルーニャ、アラゴン、レオンとカスティヤが連合。アラゴン国王:ジャウマ1世1700年～1715年: スペイン継承戦争を負けたカタルーニャは自治権を奪われ、スペイン王国の州になる。カタルーニャ政府がなくなり、カタルーニャ語使用は公衆の場で禁止となる。

1715年～19世紀中ごろまで:カタルーニャは衰退。

1975年: フランコ独裁者死亡。

1977年: カタルーニャ自治州政府「ラ・ジェネラリタット」が復活。

1988年: **カタルーニャの誕生、1000周年。**

2006年: カタルーニャ州議会がカタルーニャ自治憲章を改正。



第34回三陸酒海鮮会 2018.6.30

ご参加いただいたみなさんに感謝申し上げます



第47回

水産業再興のための料理レシピ紹介 《牡蠣の炊き込みご飯》

☆(季節により)牡蠣やホタテの冷凍を使うのもよいです。(松本談)

牡蠣いっぱいの炊き込みご飯です。牡蠣がプリプリしてます。美味そう!



郷土料理愛好家
松本由美子氏

『材料』 米 2合、牡蠣(剥き身)300g、ベビーホタテ 100g、アサリ剥き身 50グラム、あさつき 適量、白胡麻 少々、千切り生姜、かつおだし 400CC、みりん 大2、醤油 大2、酒 大1、水飴 小1

『作り方』 ① 牡蠣は、塩を振って優しく揉み、流水でしっかり洗い、キッチンペーパーでふきとります。② 鍋に調味料を合わせ、上記の海鮮を入れ、ひと煮したら火を止めます。③ 米を洗って水気を切り、煮汁とアサリのみを一緒にし、普通に炊きます。蒸らし時に千切り生姜と牡蠣、ホタテを並べ蓋をして蒸らします。④ 全体をさっくりと混ぜ、器にもり小口のあさつきを散らします。(好みで白胡麻など)



写真でお伝えする
東北の風景
(初夏の山と花々)

岩手県
写真撮影
尾崎匠



「ファンクラブ」活用 ③ 山形編 のススメ

東北にあるファンクラブの第3回、今回は山形県のファンクラブについて紹介しようと思う。山形県にも多くのファンクラブがある。特に、県南部の置賜地方を中心として、自治体、並びにその関連団体が運営するファンクラブが多いのが特徴である。

西川のまちづくり応援団

<http://www.town.nishikawayamagata.jp/dosei/02/chomin190100011.html>
山形県のほぼ中央に位置し、出羽三山のうち月山と湯殿山を擁する西川町が運営している、西川町出身の人、西川町をふるさとと思っている人が対象の、「西川町のまちづくりを考えながら、西川町を側面から応援する(応援してもらおう)ため」の会である。年会費は3,000円で、加入すると「団

員」となっており、毎月西川町から応援団会報や町広報誌、資料、観光パンフレット、イベントの案内などが送られてくる。また、毎年「関東ブロック総会」、「東北ブロック総会」、「仙台七夕交流会」、「ふるさと植樹祭・交流会」といった交流イベントに参加できる。

執筆者紹介

大友浩平
(おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
[http://blog.livedoor.jp/anagna51/](http://blog.livedoor.jp/anagna51)



Facebook
<https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo>

分の周りには同郷の人がいます。今度遊びに行ってみよう!」(西川町への観光旅行)、⑧「ふるさと西川町へ寄付をします」(ふるさと納税)、をできる範囲内でして、西川町を応援する、となっている。1997年(平成9年)発足という、山形県内はもとより、東北地方全体の同種の会の中でも屈指の歴史を持つ。

ながいファン倶楽部

<http://nagai.com/fan/>
山形県の南部にあつて、桜、白つじ、あやめ、萩などの花で知られる長井市の(一財)置賜地域地場産業振興センターが運営する、長井市内に住んでいる人、全国各地の長井にゆかりのある人ほか、誰でも入会できる「山形県長井市を応援するみなさんの交流の場」である。年会費無料の無料会員の他、年会費1,000円の「一般会員」、5,000円の「特別会員」、10,000円の「プラチナ会員」、30,000円の「ダイヤモンド会員」があることが特徴である。

無料会員は、長井市の旬の話題を届けるメールマガジンの配信、協賛店での会員特典サービス、「道の駅川のみなと長井オンラインショップ」での購入のポイント進呈などの特典が得られる。有料会員は入会・更新時にプレゼントがある他、オンラインショップでの進呈ポイントの割増、「道の駅川のみなと長井」での購入のポイント進呈、プラチナ会員には年1回、ダイヤモンド会員には年4回長井市が誇る特産品が届く。また、交流ツアーなどの催事の案内が届く他、都市圏で行う物販の案内とプレゼント引換券ももらえる。

Fun Club

<http://www.iikanjini.com/fun/>
山形県の南部、飯豊連峰のふもとにある飯豊町の飯豊町観光協会が運営する、「心身をリフレッシュする」とともに、「そこに住む『いい人』も活力を見出しながら共に『めざまの里』を体感できる、飯豊町を愛する人たちの組織」。ちなみに、「めざま」とは、フランス語の「MESAMES」(親しい友達・仲間)の意)で、「みんなで仲良く明日への町づくりをめざす、またはめざまめという希望」が込められているとのことである。

年会費1,000円の「トクトク情報コース」と、年会費3,000円の「特選旬の味コース」がある。5年間有効会員パスポートが発行されて、年4回飯豊町の情報紙が届き、町内の提携施設で特典が受けられる他、年1回会員を対象とした「これぞ飯豊町と言えるお楽しみツアー」に参加でき、来町に際して目的や季節に応じたモデルコースを提案してもらえ、相談窓口も利用できる。「特

いまっとファンクラブ

<http://www.sglc.jp/test1/imate/index.html>
山形県の中部にあつて、「隠れそばの里」、鮎、それにホップの産地としても知られる白鷹町の白鷹町観光協会が運営するファンクラブ。「いま」とは「もつと」や「もう少し」という意味で、「いま」と白鷹を好きになつてほしい」「いま」と白鷹の暮らしを体験してほしい」という願いが込められている。白鷹町外の人が入会でき、ネット会員は年会費無料、一般会員は年会費1,000円である。

入会すると「特製会員パスポート」が発行され、来町時会員証の提示で協賛店からサービスが受けられる他、白鷹町の旬の情報が毎月郵送で届く(ネット会員にはメールで届く)。年1回「白鷹町体感の交流会」が開催される他、白鷹町に来町する際には同ファンクラブが相談窓口となるなどの特典がある。

ふながたファンクラブ

<http://funagata.info/funclub>
山形県の北部にあつて、やはり鮎で知られる舟形町のふながた観光物産協会が運営するファンクラブ。舟形町出身の人もそれ以外の

出身の人でも、舟形町に興味がある、暮らしたい、訪れてみたいという人のファンクラブである。入会費・年会費は無料で、舟形の旬の情報やイベント情報などが満載のメールマガジンの配信サービスが受けられる。今後、会員限定イベント、協賛店でのお得なサービスなど様々な企画を展開する予定とのことである。

鳥海山・飛鳥ジオパーク八幡ファンクラブ

<https://www.city.sakata.lg.jp/sangyo/geopark/geofanclub.html>
山形県の沿岸庄内地方にあつて、「平成の大合併」で酒田市と合併した旧八幡町にある酒田市八幡総合支所が運営する、鳥海山やジオパークの魅力を広げ伝えるためのファンクラブである。庄内地方と秋田県の県境にある鳥海山と、日本海に浮かぶ飛鳥を含む地域は「鳥海山・飛鳥ジオパーク」に指定されている。「鳥海山と八幡地域が大好きな方」なら誰でも入会でき、入会するとオリジナル会員バッジが進呈され、そのバッジの提示で協賛店でサービスが受けられる他、ジオパーク関連イベントの情報が届き、ファンクラブミーティングなどジオパークイベントにも参加できる。

山形県の南部にあり、ダリヤで知られる川西町が運営するファンクラブである。登録すると、川西町内の店舗、事業所などの新商品、限定品、割引商品、ランチの情報などがメールで届く。

山形ファンクラブ

<http://oishi.yamagata.jp/fanclub/>
山形県アンテナショップ「おいしい山形プラザ」が運営する、「山形を知っていただく」「山形産品を買っていただく」「山形に来ていただく」など、山形産品の魅力を堪能していただくためのファンクラブである。

年会費は無料で、会員になると、メールマガジンで山形産品の情報が届く他、アンテナショップでの購入や飲食の金額によるポイント特典で山形産品がプレゼントされる。また、協賛店でのサービスや割引がある他、「おいしい山形料理教室」など会員限定イベントや「ファンクラブ会員限定!モニターツアー」などにも参加できる。

ペロリンファンクラブ

<http://www.yamagata.nmai.org/fanclub/index.html>
山形県農林水産部6次産業推進課内にある「おいしい山形推進機構事務局」が運営するファンクラブである。「ペロリン」とは、山形県産農産物などの統一シ

ンボルマークである。山形県産農林水産物のファンなど誰でも入会可能で、入会すると、メールマガジンにて山形県産農林水産物の情報やイベント・キャンペーン情報が届く。

伝国の杜ファンクラブ

<http://www.denkoku-no-mori.yonezawa.yamagata.jp/fc.htm>
「米沢市上杉博物館」と「置賜文化ホール」を含む「伝国の杜」を運営する(公財)米沢上杉文化振興財団が運営するファンクラブである。年会費は一般2,500円で、米沢市上杉博物館の常設展示室・企画展示室に何度でも自由に入館でき(同伴者1名は団体割引で入場可)、置賜文化ホール自主事業チケットの先行予約・割引販売(会員1名につき2枚まで)、年7回程度「伝国の杜だより」やファンクラブ会報、各種事業チラシの送付、ファンクラブ会員向けの講座・イベン

トへの参加、募集制ワークショップへの無料参加(1回無料券の進呈)、ミュージアムショップでの展覧会図録・オリジナル商品10%割引、ミュージアムカフェでの10%割引(同伴者3名まで)などの特典が得られる。

庄内みどりファン倶楽部

<http://midorinet.or.jp/fanclub/04.html>
JA庄内みどりが運営するファンクラブ。入会金・年会費とも無料で、ファン倶楽部通信が届く他、厳選した旬の食材の頒布会(定期宅配)の申込ができ、購入時に貯まるポイントを各種商品と交換できるなどの特典がある。

これらのファンクラブ以外にも、今年度は寒河江市が運営する「寒河江ファンクラブ」が創設される予定である他、小国町にも「小国ファンクラブ」を創設する計画があるとのことである。



『究極のアジール・東北』 で藤原氏に起こった事

昨年晩夏、私も昔から愛好して止まない岩手県盛岡市の「さわや書店」が河北新報との共同企画として、『東北の道しるべ』となってきた、そしてこれからは岩手にあつた、という主張に驚かされる『邪馬台国はどこですか?』(鯨統一郎)、秋田出身の昆虫学者がその人間的魅力を以って野生の大地を勇躍する『パッタを倒しにアフリカへ』(前野ウルド浩太郎)などが挙げられ、様々な視点から東北の良さ、凄さを感じられる選書になっていると思つた。

特に、個人的にも外せないのが征服者側からではない現地からの視点での東北の発見と日本史の再構築を宣言した赤坂憲雄の『東北学』関連である。記念すべき一冊め『東北学へ』も一冊め『東北学へ』も一九九六年は東京に数年住んだ私が東北に今一度想いを馳せ始めたであろうその頃に出現した書で、まさに衝撃の作品であつた。私ごととき者と言えど一東北人、その人生を動かした事が、これら一冊一冊の本の、陰ながら少しずつ東北を変えていく力を証明するものではないだろうか。



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出没し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

など『東北学へ』に先駆けて私に強い印象を残した内藤正敏の『遠野物語の原風景』、他にも大胆に蝦夷観を揺さぶる久慈力の『蝦夷・アテルイの戦い』や、旅行ガイドの枠を越えて読者に歴史認識と多角的視点を叩き込む『ひとり歩き東北』(二〇〇二年)など、個人的に入れて欲しかった本は少なくない。

しかしそれらの中でも今回取り上げてみたいのが、東北好きというよりは歴史好き、それも古代史寄りの読者にとっては長年一定の存在感を保持してきたであろう「独学の歴史作家」、関裕二の著作である。関氏は、一種アクの強い古代史マニアである。その著書との個人的な出会いは『謎とき古代日本列島』(二〇〇〇年)で、これは東北だけでなく全国を舞台とした古代考察だつたのだが、一〇年後には『新・古代史謎解き紀行 東北編』(消えた蝦夷たちの謎)を著し、蝦夷という古代東北住民の実態と、日本創生や天皇家との深い関わりを明らかにしようとして試みている。

千葉県出身の関氏のテーマは決して東北に偏る事なく、その得意分野は縄文時代から邪馬台国関連、そして聖徳太子や藤原不比等が活躍する大化の改新前後に渡る全国規模の古代史であるが、特に彼の面白いのは「東大寺の暗号」「物部氏

の正体」といったミステリー仕立てのタイトルで読者を引き込むロマン性、好き嫌いの激しさから来る歴史的視点・立場の一貫さで、数冊を読み通してわかるように「藤原氏」一族に対する徹底的な反感・嫌悪感が強烈な「関節」を醸し出す。なぜ関氏が藤原氏を批判し、嫌悪するのかといえば、戦乱と民族潰し合いに明け暮れる朝鮮半島からの渡来人である藤原鎌足・不比等父子の策謀によって、日本の歴史は縄文以来の調和の社会から、中国・朝鮮式の圧政・侵略型の社会になっていったという歴史観が、氏の強い信念だからである。その為、彼の中では聖徳太子らの時代までは生きていた縄文の気質が長く残り続けてきた、他ならぬ東北への共感が強い事も多くの著作から見て取れるのだ。

彼の新作『古代日本人と朝鮮半島』(なぜ日本と朝鮮半島は仲が悪いのか)の文庫化)は氏の長年の主張が世界レベルに展開しながらも違和感なく収束しており、関作品の入門編とも言える、よくまとまった集大成的な一冊になっている。タイトルだけ見ると嫌韓や日本礼賛に偏つた本かと勘ぐってしまうが、全くそういう類のものではなく、むしろ日本列島とはアフリカからヨーロッパや中央アジア、そして中国方面へと散らばり、幾多の戦いを敗

北し、あるいは逃げながら逃げて逃げて逃げまくつた果ての、最も弱い人々が流れてきた場所であり、故にある意味では世界で最も劣った民族がここに集まったのだと結論づける。つまり幾多の民族が入り乱れ、生き残りの為の熾烈な戦争を繰り返す中国大陸や朝鮮半島と、戦いを避けて逃避した人々が集まり、互いに共存する事を是としてきた日本列島では根本的に人間性が異なるのだ、という主張であり、曖昧・お人好しという日本人の短所と言われがち側面を改めて見直し、受け入れるべきだという、極めて公平で平和的な、縄文的日本の肯定論なのだ。

本書には言及されていないが、このような人類の大移動の果てに「追詰められた」人々の行き着いた場所即ち「聖地(アジール)」としての日本があるとする。その中の更に奥地であり、いわばアジールの中のアジールとしての東北が存在する事を、関氏は間違いない認識しているはずである。何故なら、日本というアジールもまた藤原氏という「憎しみといがみ合いを生み出す元凶」によって後の戦国期に代表される長い混乱期に陥られる事になるのだから、もはや逃げる場所のない日本列島において、最後のアジールとなつたのが東北である事は、蝦夷の国としての、この地の歴史が雄弁に物語っているからである。

ただ、私は一つ心にどうしても引っかかるものがある。確かに藤原氏は他の有力な氏族を排斥して中央の要職を一族で独占し、長屋王や菅原道真に代表される策謀で陥れた政敵の恨みを買つて崇り殺されたという噂も多い。東北侵略を推し進めたという点では完全に「蝦夷の敵」であるし、藤原氏の子孫が沈み行く今の日本の中枢にも多数根を張っている、となれば「呪われた一族」「日本を不幸にする一族」と関氏が罵倒したくなるのも仕方がない。実は、かく言う私もそのルーツに広島地方に土着していた、とある藤原氏一族の存在がある。



なぜ、日本と半島の気質はこれほど違うのか? 科学と歴史から日本人の正体に迫る! 日本は日本たる所以は、『縄文』にある! ならばその中の、東北とは...



あ～ さるぼぼがあ～



モウセンゴケ



フサスグリ



馬馬馬

いま、日本の南から北まで観測史上初ともいえる大雨に見舞われています。東北大震災からまだ七年、また想定を超えた自然の猛威を体験しています。日本は自然災害が身近であり、常に備えをして置く

べきだという論調もよく見聞きするようになりましたが、自然のエネルギー噴出と人間の生活とは別個のものだと思えるこの頃です。
* さて、今回号の遠野は動物がいっぱいです。

シリーズ 遠野の自然
「遠野の小暑」
遠野 1000 景より



コバイケイソウ

放牧されたたくさんの馬が楽しそうですし、ニホンカモシカが民家の敷地内まで入り込んでいますが驚きです。
最近めっきり少なくなつたイトトンボもなつかしい。サルボボというのは猿の



シャクナゲ

赤ん坊ということですが初めて見ました。
遠野の小暑の草花、フサスグリの赤、食虫植物のモウセンゴケ、コバイケイソウの白がまぶしい。



イトトンボ



我が家の庭に現れたニホンカモシカ